

校正読みにおける有効視野

応用物理学科 榎 雄也

1.1 序論

文章を読むことに関する研究は、認知心理学の中心課題の一つとして、様々なアプローチから盛んに行われて来ている。文章を読むという行為は、その文章で述べている分野、又はその個人の理解、記憶、予測、注意、情報の統合などの高次の複雑な情報処理が加わってなされる行為で、様々な要因によって読みの速度差が生じてくる。また読みの種類にも速読、熟読、校正読みなど様々な種類があり、それぞれで用いられる有効視野の範囲は異なることが推測されている。その中で校正読みは、誤字を検出するために逐次単語を注視する必要があり、通常の読み比べてサッカード距離は短く、停留時間は長いことが予想される。しかしながら、校正読みの場合、有効視野は通常の読みにおける有効視野よりも広いとの報告がある（浅野・横澤 2006）。浅野らが用いた制限視野の大きさは、通常読みにおける有効視野より大きな制限視野を用いてないので具体的な大きさは求められていない。本研究では、校正読みにおける有効視野の大きさを具体的に求めることを目的とする。

2 実験方法

被験者は日本語を母語とする正常な視力（矯正視力）を有する成人4名（YS・KM・TH・YN）で行った。実験で提示した文章は、31字×8行の横書きの日本語文章4ページで、各ページに誤字（同音異義語文字）を1～4つほどランダムに存在させた。そして、有効視野が広いことも考慮して窓枠サイズの条件を五段階（5、9、16、31、62文字）に設定した。

実験手続きとして、被験者に練習用の文章を提示し、校正読みをしてもらった。4ページの文章を読む試行を一回とした。判読中に誤字を検出した場合はCtrl キーを押し、ページを移動する場合は→のキーを押すことにした。被験者が慣れるまで何度もこの方法で試行を行った。

次に本番用の文章を提示し、練習と同様に読んでもらった。ここでの留意点は一定の理解度で読むこと、被験者の精神状態が一定となるように、疲労や飽きが生じないように随

時休息等をとることにし、2～3回に分けて実験を行った。提示する窓枠の大きさはランダムであった。

3 実験結果及び考察

読み速度は、YS・KM・TH・YN ともにある窓枠以上の広さから読み速度が一定になった。すなわち有効視野が存在した。4人の平均をとると図1の通りである。

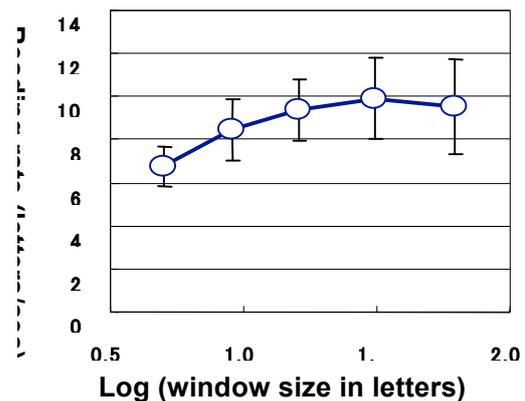


図1 平均の校正読みの速度

浅野ら（2006）は校正読みにおいて通常よりも有効視野が広いとしているが、今回の結果から見て分かるように読み速度は約15文字の窓枠から一定となり通常読みよりも特段に有効視野が広ということは言えない。浅野ら（2006）は逆行サッカードを有効視野が通常読みより広いことの原因の一つとしているが、今回のサッカード大きさの頻度分布からは、それを示唆する結果は得られなかった。

4 結論

今回用いた校正用の文章を刺激とした場合では、有効視野の大きさは予想されるように狭くもなく、また既報告のように広くもなかった。

参考文献

- 浅野倫子 他（2006）移動窓法を用いた眼球運動による校正読みの処理単位の検討 Technical Report on Attention and Cognition(2006)No. 5
 - 斎田真也（1993）読みと眼球運動 荻原ら（編）眼球運動の実験心理学 名大出版会 pp167-197
- 指導教官： 斎田真也 横井健司